

岸の柳

長唄

全詞章

明治六年（一八七三）

三代目杵屋正次郎 作曲

〔本調子〕 筑波根の姿涼しき夏衣、若葉にかへし歌姫が、みどりの髪に風薫る、柳の眉の流し
目に、その浅妻を舫ひ舟、君に近江と聞くさへ嬉し
締めて音の三味線も、絶えぬ節なびくぞ柳橋、糸の調べに風かよふ、岸の思ひも、
やうやくと届いた棹に

〔三下り〕 屋根船の、簾ゆかしき顔鳥を、好いたといへば好くといふ、鸚鵡返しの替唄も、色の
手に合ふ手になるわいな、しどけなや

〔本調子〕 寄せて返す波の鼓の、潮のさす手も青海波、彼の青山の面影や、琵琶湖をうつす
天女の光、その糸竹の末長く、守り給へる御誓ひ

実に二つなき一ツ目の、宮居も見えてかけわたす、虹のかけ橋両国の、往来絶えせぬ
賑はひも、唄の道とぞ祝しける